
君と俺

桜井葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と俺

【Nコード】

N4974G

【作者名】

桜井葵

【あらすじ】

俺はいつから君に恋をしていたのだろうか？君はいつも目立っていて、俺の手の届く人ではない…。そう、分かっている俺はやっぱり君を目で追ってしまう。きっと、そんなに君が好きなんだろう。

ブローグ

俺は君にいつから恋をしていたのだろう。

君のすべてが大好きで・・・。

笑った顔も、
怒った顔も、
泣いた顔も、
意地悪そうな顔も、

すべてが好き。

「しょうちゃん。」

君がそう呼んでくれるとどんなにうれしい事か・・・。

あの日以来会いたくて、会いたくてたまらなかった。

君の笑顔を見ることができて、

君に会うことができてとてもうれしかった。

君はいつもと変わらなく目立っていた。

プロローグ（後書き）

初の男、主人公です。

私は女なので、男の気持ちがいまいち分からない…
ですので、文章がおかしくなることをご了承ください。

評価、感想お願いします

第一章 1・再会

俺の名前は「紺野 翔」こんのしょう

高校教師で教科は国語。

俺はある女性に片思いをしている。

今日の職員室は騒がしい。

ものすごく美人で若い先生が来るとかで男の先生方がとくに興奮している。

でも、俺は興奮などこれっぽちもなかった。俺の中では片思いしている女性が一番美しいと思っているから。

——コツコツコツ

廊下にヒールの音が響いていた。どうやら来たようだ。

「こんにちは。」

すらりと伸びた美しい足、
肌は透き通るように白い、
目はくりくりとしていて大きい、
さらさらロングでブラウンの髪。

そこには俺がずっと片思いしている女性が立っていた。

「これからお世話になります、あいざわ藍澤 れいか麗華です。」
とても透き通ったいい声で言った。

職員室すべての女性先生が憧れて、男性先生は鼻の下を伸ばしていた。

彼女には小学校のときに出会った。小学校からとても可愛くて目立っていた。中学校も高校も大学も。彼女はどのくらいの人に告白されたのだろうか。

彼女に憧れない人はいないだろう。

俺にとっては全然手の届かない人。そう、自分でも分かっていた。

「藍澤先生席は、紺野先生の前でお願いします。」

「はい……。」

彼女が俺の前で止まった。一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「よろしくお願いします、紺野先生。」

彼女はそう言つと、飛び切りの笑顔を見せた。俺の大好きな笑顔のひとつ。

俺の大好きな彼女はここでも目立っていた。

「今日からお世話になります、藍澤 麗華です。」

朝会で彼女の紹介がすることになったのだ。

「2年1組担任だからよろしくね。」

俺は2年2組担任。運がいいことに隣のクラスだ。神様に感謝。

『藍澤先生、めっちゃきれい〜。』

男子が騒ぎ出した。そりゃ、年頃の男だからたまないだろうに。

いつものように俺は生徒が帰った後、図書室に向かった。

関係者以外立ち入り禁止と書かれた部屋に入った。そこで仕事を

している。いつも座っている席に向かうと、そこには彼女が座っていた。

というより、寝ている(?)

「レイ・・・?」

思わず声を出してしまつてあわてて口に手を当てた。

着ていた上着を彼女に掛けた。隣の開いていた席に腰掛けると、仕事を始めた。もちろんこんな美人が隣で寝ていて仕事に手がつくはずがなく、すぐくどきどきしていた。

「ん・・・。」

「起きた?」

彼女は大きい目をこすつた。その仕草にどきどきが倍增。

「上着ありがとう、しょうちゃん。」

久々に見た笑顔。いつも彼女は気が強い。けれど、2人でいるときはしょうちゃんと呼んでくれる。その時の笑顔が一番好き。

「ここは、関係者以外立ち入り禁止だよ。」

照れ隠しに冗談を言った。

彼女は笑った。

「じゃあ、関係者になればいいんでしょ、私、図書委員の顧問になる。」

可愛い笑顔で俺を見つめている。

麗華は俺の肩に頭を乗せてきた。

俺は信じられない思いで麗華を見る。心臓が口から出てきてしまいそう。それなのに麗華は目をつむり、何かを感じようとしていた。

「しょうちゃん？」

「ん？」

見ると目が開いていてじっと俺を見ていた。

「なんでもない。」

そういい、舌を少し出した。

とても幸せだった。はたから見ると、デレデレしていただの変態としかみえないだろう。

しかし、それでもよかった。

彼女と一緒にいられるならば。

2・二人三脚

「よーしっ！皆、今日は、二人三脚しよつかあ〜」
麗華の手には二人三脚用の縄を持っていた。

ああ見えても彼女は体育が得意。
というより、

国語も、
数学も、
理科も、
社会も、
英語も、
音楽も、
美術も、
技・家も

全部完璧にできる。大学でも、いつもトップだった。

「し…、紺野先生も早くっ！！」

笑顔で手招きをする。生徒はもう、足を結んでいた。

「私たちが見本、みせるねっ!!」

そう言っ、俺の足と自分の足を縄で結びだした。

「お、おい…!!」

俺は自分の鼓動が速くなっていくのをしっかりと感じていた。

「準備、完了」

そう言っ、俺の腰に手を回す。それと同時に俺たちの体が密着する。

「さあ、行くよー!!いち、に…」

左、右…の順番で足を動かす。

昔、高校のときに麗華と二人三脚をした。たまたまくじで一緒のペアになった。

でも、そのときは大変だったなあ！。

麗華のことが好きな男の嫉妬で大変なことになった…あの日のことを思い出すと今でも恐怖に怯える。

「早えー」

男子が俺たちを指差して呟く。

早いのは麗華のおかげだが、高校のときにも麗華のおかげで、優勝することができた。

「じゃあ、皆もやってみなっ！二人、息を合わせてねえ」

そう言っ、彼女は縄を解きだした。離れたくない！そう思っても密着していた体は離れていく…。

「しょうちゃん、昔と変わってなかったよお、息ぴったり」

俺にしか聞こえない、綺麗な声でいった。そして、可愛い笑顔を向ける。

「お前も変わってねえーよ…」

照れ隠しに反対を向く。顔が真っ赤になっていくのが自分でも分

かる。

「藍澤先生！！見てえー」

俺のクラスの生徒なのに、見てほしいのは藍澤先生だった…

彼女の指導によって、皆みるみるうちにうまくなっていた。

一番の成長ぶりを見せたのは、学校一の俊足美男二人組みだった。

「きゃーーーー！！大丈夫？」

女子の悲鳴が聞こえた。悲鳴のした方角を見た。俊足の一人が転んで膝から血を出していた。

「あらー、ちょっとひどいねえ、一緒に保健室行こっか？」
そう言っ、男子生徒に手を差し出す、彼女。

「立てる？肩、貸すよ？」

二人は肩を組んで保健室に向かって歩いていった。俺はそれを見た、黙っ、黙っているだけだった。

「そうだ！今日、養護の先生出張だった！私が手当てするけど、いい？」

いすに座らせて膝について見上げる。

「え、あ、はいっ／＼先生、大丈夫ですか？」
顔を赤くして、先生を見つめる。

「それってどういう意味？こう見えても私、養護教員の資格も持つてるんだからねえ！」
そう言っ、頭を指で弾かれる。

「すごいですね！お願いします。」
「任せてえー！！」

傷が深いから、間接のところを強くタオルで結んだ。

「しみるよ」
血をふき取り、消毒液をつける。

「いったあー」
痛そうに叫ぶ。

「だからいったでしょ」

先生は優しく微笑む。上目遣いでみてる。

「先生がいつも保健室にいれば癒されるのになあ」

俺は先生を抱き寄せた。先生からは甘い、優しい香りがした。

「教師をからかっちゃだめだよ」
そう言っ、俺にでこピンをした。さすがに先生は大人の女だったから全然動揺していなかった。

同年の女はすぐ動揺するの…

「だ、大丈夫か？」

しょうちゃん…、紺野先生が走って入ってきた。

「大丈夫ですよっ！そんなに心配しなくてもー」

「お、おう！」

俺が心配していたのは、お前じゃなくて…麗華だ。

あいつは、変な気を起こしやすいやつだから…

保健室に二人きりはまずいと思ったけど、大丈夫だったみたいだ。

「お疲れ…」

今は、保健室から職員室に帰っている途中である。

「うん、養護の資格も持つてるから大丈夫だった。」

そう言って、微笑む。その笑顔に顔が真っ赤になった。

「しょうちゃん、顔真っ赤だよ？疲れた？」
小悪魔…。俺はそのときそう思った。

「そうだな、久しぶりにレイと走ったからな…」
麗華の目を覗き込む。綺麗な瞳が輝いている。

「おい、紺野——！！お前——！！藍澤先生と二人三脚したんだってなあー（怒）」

その後、教師たちからの嫉妬が半端なく大変だったことはいうまでもない。

やっぱり俺は彼女とはつりあわない。

2 二人三脚（後書き）

評価、感想よろしくお願いしまあーす

3・2人つきり

「藍澤先生、先、失礼しまーす！お疲れ！！」

30代前半ぐらいの男教師、山本が麗華の机に片手をおき、笑顔で話しかける。

俺は、麗華の前の席だから、山本の顔がにやけていてかなり腹立つ。

「あ、お疲れ様です。」

彼女はそれだけ言っと、また仕事を再開する。

山本は面白くなさそうな顔で帰って行った。

これで俺たちは二人きりだ。

「終わったあー！！」

そう言っつて、背伸びをする。

俺はとっくに仕事が終わっていたけど、仕事が終わっていないフリをしていた。

「俺も今、終わったところ！」

あまりにもわざとらしくったかな？そんなことを思いながら正面にいる彼女を見た。

彼女と目が合う。彼女は優しく微笑む。

鼓動がだんだん速くなる。

「じゃあ、帰ろっか」

そういつて、立ち上がる。

それって、一緒に帰ろうってこと？

「しょうちゃん、このあと飲みにいかない？」
俺は持っていた荷物を落としてしまった。

「大丈夫？はい！」

呆然としている俺に変わって彼女が拾ってくれた。

「あ、ありがと／＼／」

彼女の行動ひとつひとつにドキドキしてしまう。

きつとこれは彼女だから…初恋だからなんだろうな。

たまたま今日、彼女は車で来ていなかったから、俺の車で行くことになった。

こんなことになるんだったら、車の中きれいにしていればよかった…

「久しぶりー」飲むの!!」

そう言っつて、俺の腕を引っ張る。

い、今、俺の腕に…麗華の手が触れている!?

「さあー!飲むぞおー」

「もう、やめときなよ…」

かなり飲んでいる彼女を止める。

俺は車の運転があるから、酒は飲まなかった。

「んー!。スースー」

「ちょ、お、おい／＼／／」

俺の腕にしがみ付き、肩に頭を乗せて寝息を立てながら寝てしまった。

心臓が口から飛び出してしまいそうになった。

おまけに、彼女の大きい胸が腕に当たる。

俺は、引き離そうとした。

「ん――」

が、

離れない。

「……ん」

思わずつぶやいてしまった。完全に眠っている彼女…。家、分らないし…

「ただいまー…」
つれてきてしまった…。

彼女を置いてくる訳にもいかず、家に連れてきてしまった。

「スースー」
気持ち良さそうに眠っている。

とりあえず、自分のベットに彼女を寝かせた。

まさか、一緒に寝る訳にもいかず、俺は風呂に入ってベットの下に寝た。

「んー」

起きたら知らないベットで寝ていた。二日酔いで頭が痛い。

「あ…」

ベットの下でしようちゃん…、紺野先生が寝ていた。

きつと、優しいしようちゃんは、私が酔いつぶれて寝たのをほっとけなくて家に連れてきてくれたのだろう。

自分は床で寝て、私にベットで寝かせてくれた。本当に優しいなあー。

「ふうあー」

背伸びをして起きる。

起きるとベットの上でこっちを見つめている彼女と目が合う。

「おはよー」

ニコッ

っと微笑む彼女。

「おはよ…、体、大丈夫？」
目線を床に落として問いかける。

「え！しょうちゃん、なんかしたの？寝ているときに…」
意味有りげに微笑む。

「し、してねえーよー！」
あわてる俺に彼女は俺の頭をなでる。俺は子供か？そう思った。

「あつ！ベットありがとねえー」しょうちゃん寒くなかった？」
ベットから降りて、俺と目線を合わせる。そんな行動にドキドキ

する。

「そ、だあー！私、お礼に朝ごはん作るね♪」
そういつて、立ち上がる彼女…

「いいよ、それより…風呂入ったらあ？」
顔を見ることができなかった。

今、彼女を見てしまうと、心臓が飛び出てきてしまいそうだったから…

「え？一緒に入るの？えっちいー」

何でそんなこと平気で言えるのかが分からなかった。

「一人で入れえー！！」
そういつて、風呂場に押し込んだ。

やばい…、心臓出てきてしまう！それより、俺、以上な反応をしてしまった…

一緒に朝食を食べ、二人で学校に向かった。

なんだか、付き合っているみたいでうれしかった。

こんなことを思っている俺って、本当にバカだよなあー！

彼女が俺なんかを相手にしてくれるわけなんてないんだから…

でも、それでも…。俺はそれでも幸せだった。

4・新たな出会い

すらりと伸びた美しい足、
肌は透き通るように白く、
目はくりくりとしていて大きく、
さらさらロングでブラウンの髪に、
そそられるようなきれいな体。

「たまんねえーなあ~~~~／＼／＼／＼」
男子生徒、森川^{もりかわ} 春樹^{はるき}は顔を真っ赤にして、
呟く。

「はーるーきい~~~~!!何、妄想してんの？」
その友達、田代^{たしろ} 龍^{りゅう}は春樹の頭を叩く。

「なあ、何で分かったあ~~~~??」
顔を真っ赤にしていたのをさらに真っ赤にする。

「顔、やばいよ!!!緩みすぎてる……」
ため息をつく。

「だって、だってえー！！！俺好みの年上で、めっちゃ美人でえー、優しいって、反則だろ？俺…、マジで好きになっちゃったあー」

少し興奮気味に話す。

「確かに、お前好みの年上で、めっちゃ美人で、綺麗な体してっけどおー！優しいかは分かんないじゃん？」

春樹を宥めるように頭を撫でる。

「んなあー！！俺、綺麗な体なんて一言も言っていないんだけどおー！お前も思ってたあ？てか、優しいって！！俺、この間転んだとき、手当てしてもらったもーん」
撫でられていた手を振りほどく。

「普通、思わないやついないだろ？」
龍は真っ白の肌を少し赤くする。

春樹は、二人三脚で転んで、保健室で手当てしてもらい、麗華を抱き寄せた張本人だ。

―ガラガラ

体育館の入り口が開く。

春樹と龍は座って話していたので、慌てて立ち上がる。

「あああああ！！！！！」

春樹が体育館全体に響きわたるような声で叫ぶ。

その原因が…

「今日から、バスケット顧問になる、藍澤先生だ。」

紺野先生が藍澤先生を紹介する。

「よろしくねえー♪」

藍澤先生は優しく微笑む。先生の笑顔に顔が赤くなる。

「うそおーん！！！！！！まじっすかあ~~~~！！！！！」

またもや、春樹が叫んだ。

「なあーに？私が顧問になっちゃ悪いことでもあるの？」
すねたような顔をする。

「悪くないですうー！逆ありがたい！！！！」
うれしさのあまりに暴れだす春樹。

「春樹、お前、少し黙っとけ！！」
そういつて、龍は背中を叩く。

「俺、部長の田代 龍です。それで、こっちが副部長の森川 春樹です。よろしくお願いします。」

しつかりものの龍は軽く紹介をすると麗華に握手を求める。

「よろしく、頼もしい部長ね」
優しい笑顔を向け、握手をした。

「ああ~~~~！！龍てめえ~~~~！！」
春樹が龍を追いかける。龍は春樹から逃げる。

「はは、おもしろーい」
麗華はたのしそうに笑っているが、俺は笑えなかった。

レイは、小、中、高とバスケ部に入っていた。俺は昔から運動がさほど好きではなかったから、部活には入ってなかった。

でも、彼女…。レイは運動が大好きで、特にバスケが得意だった。俺はそのころからレイが好きだったから、レイと少しでも一緒に居たくてバスケ部に入った。

最初はレイが目的だったが、だんだんバスケが好きになっていった。バスケをするのが楽しくなっていた。

「ねえ、聞いてる？」

気がつくと麗華が俺を見ていた。

「う、なに？」

絶対俺、顔赤いよな？

「だーから！あの子達って、全員しょ…紺野先生のクラス？」
彼女の視線の先に居るのは…

春樹、

龍、

いとう ことみ

伊藤 琴美、

きみじま まい

君島 舞。

だった。

全員俺のクラスだ。

おまけに4人は幼馴染だ。

「ああ、そうだよ！あいつら、幼馴染なんだよ！仲いいだろう？」
そらしていた目を彼女に向ける。

「幼馴染かあゝ、いいなあ」

そのとき、彼女がさびしそうな顔をしてた理由が分からなかった。

これには訳があったのに…

5・複雑な関係

「田代くん！！何してるの？」

麗華は、屋上でぼんやりとしている龍を下から声をかける。

「あ、先生ー！ちよつと、悩みごと…」

龍は上から先生を見下ろす。

「悩みい？大丈夫？今からそっち行くからあー！！」

優しく微笑むと5歩後ろに下がった。

深く、深く息を吸い込む。

そして、吐く。

校舎に向かって走り出す。

校舎まであと一歩のところまで飛ぶ。

ーガシッ

パイプを掴み、屋上に着地する。

「着地成功♪」

龍をみてニツコリと笑う。

「えー！！せ、先生？」

龍は驚く。

「何、驚いてるの？」

麗華は不思議そうに見つめる。

「お、驚きますよ／＼」

じっと、見つめられてドキドキする。

「何で？昔からやってたよ！」

普通に驚くことを平然という。

「で、悩みて何？」

麗華は龍の隣に座りこむ。そして、優しく問いかける。

「先生、俺と春樹と琴美と舞って幼馴染って知ってる?」
龍も同じように座り込む。麗華の顔を覗きこむようにして見つめる。

「うん、知ってる」

龍から視線をずらし、遠くを見つめる。

「それがまた、ややこしくなってるさあー」
ため息交じりに話す。

「何で?」

まだ遠くを見つめて、空に向かって淋しそうに微笑む。

俺と春樹と琴美と舞は幼いころからずっと一緒に遊んでいた。
最初は、俺と春樹が仲良くて、琴美と舞が仲良かった。でも、何かがきっかけで4人で遊ぶようになった。

春樹は昔から年上にしか興味がなかった。確かあいつの初恋は隣の家の10歳年上の中学生だった。優しく、可愛いくとか言ってたかな？

容姿端麗、運動神経抜群だった春樹は昔から人気があつた。でもどんなに綺麗な同い年の子が告白してもOKしたことがなかった。本当に年上しか興味がなかったんだ…

中学生になったころだった。春樹は先輩と付き合うようになり、いろんな女と遊ぶようになった。いままで本気になった女なんていなかったと思う。

いろんな女と遊んでいる春樹を近くで見て、心を痛めているのが琴美だ。

琴美は昔から春樹が好きだった。ずっと春樹が好きで、でも春樹はそんな琴美を一度も相手にしたことがない。ただの幼馴染だと思っっているんだ。

琴美は、小麦色の肌、真っ黒のショートヘア、身長は女子にし

ては大きく、可愛いつてほどではない。

それでも、彼女は学校一性格が良いと思う。元気で明るく、とてもさっぱりしている。

龍はそんな琴美が好きだった。どんなに春樹が相手にしなくても明るく、元気にがんばっている琴美が愛しく思えてならないのだ。

龍も春樹に負けないぐらい容姿端麗だ。誰もが認める美男子である。

そんな龍が人気がないはずもなく、たくさん告白されている。

龍は性格がおとなしく、人懐っこいのでそういうところでも人気がある。

舞はすごく美人だ。色が白く、顔も整っている。そんな彼女が好きなのは龍ってことだ。

明るく、元気で活発な琴美とくらべると、おとなしくて、内気な女の子だ。

言いたいことが思ったようにいえないのだ。そのせいでよく龍とすれ違いになってしまう。

それでも舞は龍が好き。いつかは自分の思いを伝えたいと思っている。

春樹は麗華がすきで、

琴美が春樹をすきで、

龍が琴美が好きで、

舞が龍をすき…

どうにも複雑な関係だ。

「どう思っ？」

龍は一通り話終わり、麗華を見つめる。

「どう思っって…」

さつきから、龍の話を聞いてから自分は動揺している。

「先生は誰が好き？初恋いつ？」

興味深々な龍。麗華に顔を近づける。

「さあ、だれだろ？……でも、私の初恋はとくに終わって
よ…」

さつきまで見ていた空をまた見つめる。

「え、先生も失恋したことあるの？てか、そいつどんだけ自惚れ
てんの？」

目を見開き、麗華の肩を大きくゆする。

「失恋…か、そうなのかもね…」

麗華は空を見つめながら思った。

私の初恋はまだ続いているのかもしれない。見えないだけで、永
遠に続くかもしれない…

それとも、あらたな恋をするのかもしれない。

「先生？」

心配そうに見つめる。

「ん？」

そういつて優しく微笑む。そこらの男がみんな惚れてしまいそうな笑顔で微笑む。

「な、なんでも、ない…で、す…／／／／／」

龍も顔を真っ赤にした。

不思議に思いながらも麗華は空を見つめる。

とても淋しそうに…

でも、なんで淋しそうな顔をしているかはまだ、誰もわからなかった。

5・複雑な関係（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

6・涙の意味

気のせいだろうか…

この頃、麗華が淋しそうな顔をするのは…

そんな顔をされるとたまらなく胸が痛む。

彼女には笑っていてほしいから。

「紺野せんせい」

笑顔で手を振ってくる同僚の鈴木奈緒すずきなお。これが麗華だったらいいなと思うことがたくさんある。

「なんですか…」

腕にしがみついて見つめてくる。鈴木は自分に自身があるらしく、

こうすれば、男はみんな惚れると思っているみたいだ…

でも、俺はただ、うっとうしいと思うだけだ。

「お昼、一緒に食べましょう！屋上で、二人きりで…」
鈴木はそういうと俺の腕を引っ張った。

俺はため息をついた。

風で髪がたなびく。

太陽の日差しに照らされて私は真っ青な空を眺める。

どうしてだろう…

この頃、この学校に来てから昔のことを思い出すことが多くなった。

忘れてしまいたいのに…

紺野先生…しょうちゃんがいるからかなあ？

田代くんたちを見ていても、思い出しちゃうんだよね…

はあ、やばい…！

泣きそう…

—ポトツ

一粒、涙が落ちる。

一回落ちると止まらなくなる…。

「あ…!!」

鈴木に腕を組まれている俺…

俺が腕を組んでほしい人…、触れたい人がそこにいた。

「あれ？藍澤先生も屋上（うわ）に来るんですねー」
組んでいる腕をわざと見せる。

「え…、まあ…」

俺はそのとき見たんだ…。

彼女の涙を…

慌てて吹いてたけど、俺にははっきり見えた。

なんて言っただって、俺は11年も彼女だけを見てきたのだから…。

「あの…、すいません私…失礼します。」

彼女は走って帰ってしまった。

「失恋かしら？あんなに美人が…」

鈴木はそう、言っていたが俺はそうは思わなかった。

やばい…

鈴木先生としようちゃんに泣き顔を見られたかもしれない…

ードンッ

誰かにぶつかって、体がよろけた。

「おわっ、大丈夫？ せんせっ／＼／」
私は田代さんに体を支えられた。

「あ、うん！ ごめんねえー」
さっき、泣いていたことを思い出し、慌てて顔を隠す。

が、遅かった…

「先生…、泣いてたの？」
心配そうに私を見つめる。

「…」

何も言えず、私はただ黙っているだけだった。

「この間、先生が俺の話し聞いてくれたから、今度俺が聞いてあげる。」

そういつて、田代くんは私をベンチに座らせる。

「ねえ、話して…」

じっと見つめてくる田代くんを見ると、さっき収まったはずの涙がまた溢れてきた。

田代くんを見ているのもつらくなった私は、下を向くことしかできなかった。

「私…、の…、好きなひ…と、死んだんだあ…」
溢れる涙は止まらない。

田代くんは、黙って聞いてくれていた。

私には大好きな幼馴染がいた。

名前は、「池澤^{いけざわ} 祐希^{ゆうき}」幼稚園で初めて会った。私は祐希と仲良くなり、幼稚園ではもちろん、幼稚園の終わった後も一緒に遊んでいた。

私は、いつの間にか祐希を好きになっていた。

祐希はすごく優しくかった。私が転んで泣いたら必ず、

「大丈夫？泣かないでえ！！痛くないよぉー」

そういつて、頭を撫でてくれた。

赤茶の髪、

まん丸の大きな目、

白い肌、

祐希はフランス人形みたいな男の子だった。

私は、優しくって、可愛い祐希が大好きだった。

でも、私は知らなかったんだ…

きずいてあげられなかった…。

祐希が傷ついていたことを…。

あれは、私たちが小学、5年生の春だった。

祐希が珍しく学校を休んだ。

私は心配だったから、祐希の家に行った。

そのとき見てしまったんだ。

見てはならないものを…

見ないほうがよかったものを見てしまったんだ…。

6・涙の意味（後書き）

なんか、麗華ちゃんがかawaiiそうって思ってくれた人、ありがとうございます。

でも、彼女は幸せにしてあげる予定です。あくまでも「予定」ですが…

評価、感想お願いします。

番外編＜登場人物＞

♂
…
男

♀
…
女

♂ 紺野 翔♂＜こんの しょう＞

＜主人公＞

― 高校教師。麗華こと、レイにずっと片思いをしている。バスケット顧問。麗華LOVE―

♀ 藍澤 麗華♀＜あいざわ れいか＞

<ヒロイン>

―美人で性格が良い。何でも出来るパーフェクトな女性。バスケット顧問。運動が得意―

♂山本 裕二郎 ♂くやまもと ゆうじろう>

―30代前半の男性教師。麗華に憧れている。野球部顧問―

♀鈴木 奈緒 ♀くすずき なお>

―20代後半}30代前半の女性教師。翔が好き?―

♂ 田代 龍りゅう。くたしろ りゅう
― バスケ部、部長。性格がかなり良い。美形で、頼れる部長。琴美が好き―

♂ 森川 春樹はるき。くもりかわ はるき
― バスケ部、副部長。麗華が好き。カッコよくて、バスケが得意で人気がある。が、女遊びが激しかった頃もあった。―

♀ 伊藤 琴美ことみ。くいと うことみ
― バスケ部、マネージャー。春樹が好き。舞の親友。元気がとりえ。あまり顔に自身がない―

♀ 君島 舞 ♀ くきみじま まい >
― バスケ部、マネージャー。 龍が好き。 琴美の親友。 可愛い、おとなしい。 学校のアイドル ―

♂ 池澤 祐希 ♂ いけざわ ゆうき >
― 麗華の幼馴染。 麗華の初恋相手。 ―

番外編＜登場人物＞（後書き）

遅くなりましたが、登場人物です。

新しく登場した人物もどんどん付け足していくので、

「あれ？こいつ知らない。」

と思ったら見てください。

感想、評価お願いします。

第二章 1・死

そのとき、見てしまったんだあ…

見てはならないものを…

見ないほづがよかったものを見てしまったんだ…。

「祐希!!」
私は叫んだ。

「れえー、ちゃん…」

祐希は泣いていた。

祐希は、タンクトップを着ていた。

そこから見えた多数の傷…

「ゆ…つき…」

涙で前が見えない。

いつも遊んでできる傷とは違かった。

傷口からは血が出ている。

何ヶ所かは青紫色の痣がある。

「麗華ちゃん…」

祐希のお母さんが私を見る。

「おば…さん…」

おばさんはおじさんが使っている「金属バット」を握っていた。

すぐに分かった。それが…、何に使われていたかを…。

祐希は虐待を受けていたんだ。

おばさんに…

私は気づいてあげられなかった。

一番近くにいたのに…

「れえーちゃん…」

祐希は泣いたまま笑った。

「祐希…?」

きつと、私に心配させないようにだと思っ

「れえーちゃん、大好きだったよお…」

過去形だったことに疑問を持つ。

「わたしも…、祐希のことだいすきっ」

そう、笑顔で答えた。

祐希は決心したように立ち上がる。

そのときの顔はすごく男らしく、かつこよかった。

「ゆうきいいつつっ!!!!!!!!!!!!!!」

私は大声で叫んだ。

祐希は、ベランダの手すりの上に立つ。

彼はゆっくりと振り向く。

そして…

「れえーちゃん、ありがとっ！だいすき……」
もう一度微笑むと祐希は一瞬で消えた。

「ゆうき――！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

私はそれからの記憶があまりない。

立つことができなかった。

涙は止まらなく、私はいつの間にか眠っていた。

葬式はみんな泣いていた。もちろん、私も……

祐希は、2階から飛び降りたのに、顔にはほとんど傷がなかった。

まるで眠っているように…

白い花で覆われていく祐希…

「ゆうき…、私を置いていかないで…」

私は心の中でそう、叫んでいた。

覚えているのはそれぐらい…。

その後、私は親の仕事で隣町の小学校に転校した。

あの後、おばさんがどうなったかは分からない…。

「そうだったんだ…」

田代くんは私の手を優しく握る。

溢れる涙を抑えようと必死になる。

「先生…、泣きたいときはなきなよ、堪えることはない。俺の胸、貸してあげるっ」

そういうと、田代くんは私を抱きしめる。

田代くんの体温が、心臓の音が、私を安心させる。
私は田代くんの胸の中で泣いた。

俺は立ちつくしていた。

自分の目を疑う。

俺は、麗華の後を追ってきた。

やっと、見つけた…と思っていたのに…。

麗華と龍は抱き合っていた。

と、言うより…抱き合って、泣いている。

彼女が苦しんでいるとき、俺がそばに居てあげられなかった。
そばにいる奴が、龍だということが悔しかった。

「ありがとう、もう大丈夫っ!!」
優しく微笑む。

「いいえっ！」

こちらも優しく微笑む。

「じゃ、帰ろつかぁー」

そういつて、立ち上がる。

二人はみんなの元へ帰っていく。

「先生っ！泣き顔も、綺麗だね♪」
悪ガキみたいに微笑む。

「うっ！！見た？よねえー？」
引きつったように笑う。

「ばっちり！！！！」
そういつて、ウイंकをする。

私はそのとき思った。

人に話すことって大切なんだ！ってこと。

誰かに話せば気が楽になる。

たまたま、相手が田代くんだったからカモ知れないけど…。

田代くんには感謝したい。

本当に、

「ありがとう」

私は、これから、人の心を癒してあげられる先生になりたいと思

った。

人の心を満たしていきたい。

祐希の分まで…

第二章 1・死（後書き）

とうとう明らかになった、麗華ちゃんの過去。

麗華ちゃんは、悲しい過去背負って生きてきたんです。

次回、龍と麗華を見て悔しい思いをしている翔が行動を起こします。

感想、評価お願いします。

2・過去

俺が初めて、麗華に会ったのは小学6年生の4月だった。彼女は転入生として俺らのクラスにきた。そのとき、一目惚れしたんだ。彼女に…。

「今日は転入生を紹介するっ！！入れ！そして、自己紹介をしろ。」
担任の先生はそういうと、席に着いた。

「こんにちは、今日からこのクラスでお世話になります、藍澤麗華です。仲良くしてねえー」

彼女は可愛い笑顔を向けた。

クラス全員が頬を赤く染めていた。

「俺、麗華ちゃんのこと好きです！！！！」

一人の男子がそう叫んだ。

その男に続いてたくさん男が愛を叫んでいた。

「静かに！！藍澤は紺野の隣な」

先生が俺を指差す。彼女と目があつた。

「よろしくね」

麗華はそういうと、優しく微笑んだ。

「ああ、よろしく。」

これが麗華と俺との初めての会話だった。

「ねえ、紺野くんのこと、「しょうちゃん」って呼んで良い？そんなで、私のことレイって呼んでね」
ある日、麗華が言った。

「え？」

俺は不思議に思い、麗華を見る。

「いい？」

麗華は少し悲ししそうに見つめてく。

「う、うん。いいよ…」

俺がそう言つと麗華は微笑んだ。

それから、俺は麗華を「レイ」と、麗華が俺の事を「しょうちゃん」と呼ぶようになった。

彼女は毎日呼び出され、告白されていた。

「しょーちゃん、何、考えてるの？」

翔は図書室の中で過去を思い出していた。あまりにも考えすぎて麗華が来ていることに気づかなかった。

「え？あ、レイ……」

俺は麗華がいることに驚いたが、昔を思い出していた。なんて言えるわけもなく、俺はただ黙って麗華をみつめる。

「まあーいいやつ……」

麗華はそういうと俺の隣に座る。麗華の優しい、甘い香りが鼻をくすぐる。

「なあー、覚えてる？俺らが初めて会ったときのこと……」

いつの間にか麗華の髪を撫でていた。

「え？ごめん、覚えてない。」

麗華は申し訳なさそうに俺を見ていた。やっぱり麗華にとって俺はそんなもの。

「なあーんて、嘘だよー、忘れる訳ないじゃあーん……」

麗華は舌を少し出すと、ニツコリ笑った。

「しょうちゃん、聞いたことしか話してくれなかったよね……」

そうだ。俺は、必要以上麗華と話さないようにしていた。本当はすごく話したかったけど……。

でも、俺なんかが話していい人じゃなかったから……

「俺となんか話してて楽しい？」

そういつて冷たい目で麗華を見た。

「楽しいよ……」

そういつた麗華の目は悲しいといていた。

「俺、かつこよくないし…楽しくないよなあー…」

思っていたことをいつのまにか声に出していた。

「そんなことないよ！…しょうちゃんは、かつこいいし、楽しいよあー…」
「つて何言つてんだ？私／＼／／」

見る見る麗華の顔が赤くなっていく。

「え？」

俺は気が付いたら麗華を抱きしめていた。

俺を好きになってほしい。そんな思いが頭の中をよぎる。

もし、俺がもう少しかつこよかったら俺のことを好きになってくれたかもしれない…

「俺、ずっと、初めて会ったときから好きだった。」

言うはずではないことまで言ってしまう。きつとそれは龍が抱きしめていたところを見たから。俺は、悔しかったんだ。

「ごめん…、考えさせて…」

俺は麗華を抱きしめたまま目を見開く。彼女がその場で振らないのは初めてだった。それだけで十分嬉しかった。

私は、しょうちゃんからの言葉がずっと頭から離れない。

『俺、ずっと、初めて会ったときから好きだった。』

いままで、星の数以上の人から告白された。
でも、いつも祐希の笑顔が浮かぶ。告白して5秒以上かけないで振
っていた。あまり相手を傷つけない言葉で。

今日、初めて「考えさせて」なんて言った。それがしょうちゃん
だったからなのかもしれない…。

祐希…

私は、一生恋なんてしないって決めたのに…

恋したのかもしれない。

どこか祐希に似ているしょうちゃんに。

ゆづき……

私は、あなたが好きです。

私の記憶では幼い、5年生の祐希しか知らない。

私だけ年をとってしまった。

でも、私の心は止まったままなんだ。

しょうちゃん………

こんな私だけど、好きになっただくれありがとう。

そして、ごめんなさい…

2・過去（後書き）

翔と麗華の出会い。

そして、やっと翔が自分の気持ちを麗華伝えました。そんな翔の気持ちに揺れる麗華。

さて、二人はどうなるのか？

感想、評価お願いします。

3・決意

「おはようございまあーす！麗華ちゃん」

春樹は誰もが惚れてしまうような笑顔で麗華に挨拶をした。

「おはよう」

麗華はその十倍の笑顔で返した。

「せんせっ！！おはよう　よく眠れた？」

龍は優しく微笑む。

「うん」おかげさまでぐっすりと！！」

麗華の笑顔を見て、安心をする。

「また、話そうね。」

きっと、相談したいってことだろうなとおもった麗華は微笑んだ
ままうなずいた。

「お、おい！！なんだよ！龍！！！！」

そんな様子を見ていた春樹は怒って龍の胸倉をつかむ。

「ひ・み・つ」

そういつて走っていく。龍を追いかけて春樹が走る。そんな二人の様子を見ながら温かいまなざしで見える麗華。先生の温かいまなざし。

「はあー!!どうすりゃーいいんだっ?!!」

翔は頭を抱えて悩んでいた。こういう顔をして麗華に合えばいいんだ?

「あー!!イラつくっ!!!!」

そういつて壁を殴る。翔は昨日、悔しさで一生伝えるはずのない思いを伝えてしまった。

「なんで伝えてしまったんだ?!」

頭が痛い。あの麗華が俺なんて相手にするはずなんてないのに。ただ傷付くだけなのに...

なんで、俺は告白したんだ?

レイ、頼む俺を好きになってくれ。俺を...

「今日の体育は、飛び込みです。」
ビキニにＴシャツというエロイ姿で微笑む。

「はぁーい／＼／＼／」

男子生徒はもちろん喜んで返事をする。そんな中、女子は不満でいっぱいだった。女の子が飛び込みは危ないだろうに……。と思う。

「まずは、低いところからね♪」

そついうと、一番低い飛び込み台を指差す。

「やっぱり最初は田代くんだよね♪」

田代くんを見ると期待の目で見つめる。

「はぁーい！！田代龍いきまぁーすっ」

そついつて飛び込み台に立つ。満面の笑みを皆に送ると飛び込んだ。

「きゃーーーーー！！！！龍くんカッコイイ♪」

女子は歓声を上げて微笑む。

「ぶはあー!!」

そういつて前髪を上げる。

「田代くん!!よかったよ!カッコよかった」

麗華はそういうと優しく微笑んだ。

「お、俺もやるッ!!」

麗華にほめられていた龍をみて自分もほめてほしいのか、向きになっっている。

「しっかり見ててねッッ!!」

春樹はそういうと、飛び込み台に立った。

「春樹くん!がんばってえー」

女子の歓声が響いている。

「見てた?麗華ちゃん!!」

春樹は得意げに麗華のほうをみた。…が、そこに麗華の姿はなかった。

「ひゅー!!!いいねえー」

今度は男子の歓声が大きくなった。

一番高い飛び込み台の上に麗華が立っている。

いつもは見せない真剣な顔で立っている。そして、ゆっくりと深呼吸をした。

―ストン

水しぶきが飛ぶ。

麗華は綺麗に飛び込んだ。

（やっぱり気持ちいい♪）

私は揺れる水面を見ながら昔を思い出していた。

私は、昔飛び込みをやっていた。きっかけは祐希で…。祐希が飛び込みをやっている姿がかっこよくて、私も始めた。祐希のほうかうまいのにいつも私が飛び込むと駆け寄ってきてほめてくれたな…。

そんなことを考えて自然と笑顔になった。

「そうだった―！」

私は声に出してしまった。

もし、しょうちゃんが一番高い飛び込み台から飛び込んだら告白をOKしよう！

きっと私はしょうちゃんのが好きだ。でも、好きだと思っても祐希の顔が浮かぶ。私は祐希の自殺が受け止められていないんだ。まだ、信じられないんだ…。きっとどこかで生きてる。また、

笑って

「れえーちゃん」

って言うてくれると信じてるんだ。だから、しょうちゃんを好きって認められないんだ…

しょうちゃんが飛び込んだら祐希を忘れよう。
そして、新たな人生を歩もう。

自分の人生を…

3・決意（後書き）

今回は短くなってしまいました。

はい、麗華は決意しましたぁー。

さて、翔は飛び込めるのかっ？！でも、きっと翔ならやってくれるよね？

でも、次回は高校生の恋愛です。さぁーだれでしょうか？龍くん？春樹くん？琴美ちゃん？舞ちゃん？だれでしょうか…

感想、評価お願いします。

4・男と女

マジで落ち込むわあー。麗華ちゃんは俺が飛び込んだところ
見てくれなかった…。

まあーでも、麗華ちゃんの水着姿ビキニを見ることが出来たし／／／／

良しとするかつー！

「はよおー!!」

春樹は元気に挨拶をしながら教室に入った。

「おはよおー!!春樹くん」

女子が頬を桃色に染めて、明るく挨拶をする。

「おー」

適当答えて、自分の席に鞆を置くと彼らのところに行く。

「はよっ!」

春樹は龍の頭の上に手を置きながら言った。

「はよおー」

龍は頭に置かれた手を振りほどきながら言った。

「さあー言ってもらいましょうかあー!!田代くん?」

春樹は意味ありげに微笑む。

龍は苦笑いをした。

「俺の麗華ちゃんと何の話があんの?」

ニコツと笑うとじっと見つめる。無表情で。

「はあー!!!相談だよっ!先生に相談するのは普通だろ?」

大きなため息をつきながら、呆れるように春樹を見るとまた苦笑
いをする。

「じゃー、俺も相談しよっ！！その後は、抱きしめてキスして…
そのあとわぁー／＼／＼」

一人で言っで、一人で顔を真っ赤にしている。傍^{はた}から見ればただ
の変態だ。

「お前、それ、相談っていわねえーだろっ！！下心ありまくりじ
ゃん…」

春樹から一歩引いて、変態を見るような目つきで見る。

「そーいうお前は下心ぜんぜんないのかよっ！！！！！！」
睨みながら言う。

「ない……………つよ…」

そっいつて春樹から視線をずらす。

ないと言っでから、麗華を抱きしめてしまったことを思い出した。
（でも、あれは慰めるためで…。決して下心でやった行為ではあ
りません！！）

龍は誰に否定したらいいか分からず、とにかく心の中で否定をし
た。

そんな二人の様子を近くで見ている人がいる。

「琴美」と「舞」だ。

琴美は春樹をじっと見ていた。とても悲しそうな目で…。

舞も同じ用に龍を悲しい目で見つめる。舞の綺麗な瞳はより綺麗に見える。

琴美は唾を飲み込むと、いつものように明るい笑顔で春樹を見つめる。そして…。

「なあーに、春樹には私がいるじゃん」
明るく微笑みながら言う。その笑顔はとても癒される。疲れが取れるような気がする。

「はああああ?!?!」

冷たい目を龍から琴美に移す。

「なに、その反応！ひどーい！！」

パーンと綺麗な音が響いた。琴美が春樹の背中をたたいたのだ。

「痛っ！！何すんだよっ！！暴力女あー！！！！」

そういつて、右手を振り上げた。

「あ／／／／」

「男の子が女の子に手を上げるのは駄目だよっ、たとえどんなことがあっても…」

そういつて、やさしく微笑む。

麗華はちょうど教室の前を通りかかったとき、琴美が春樹の背中をたたいた。そして、春樹が琴美に手を上げる寸前で手を握った。

だれもが、「うつせいよっ」と言うと思った。ああなっただ春樹は止められない。が…

「ごめんなさい。気をつけます／／／」

赤面しながら謝ったのだ。

「さすが森川くんだねっ」

麗華はそういつとやさしく微笑む。

「はぁー／＼／＼」

俺は大きなため息をした。さつきから顔が緩みぱなしである。「さすが森川くんだねっ」と言っている麗華ちゃんの声と笑顔が頭に焼きついている。授業どころではないのだ。

そんな緩みっぱなしの顔を紺野先生は不思議そうに……いや、険しい表情で見ている。

それには気づいていた。でも、引き締めようにも引き締められない俺にもどうしようもないのだ。きつと、俺は放課後居残りだろうな……。

「はるきいー！！てめー、俺の授業でほかのこと考えてただろっ！！また、女のことか？」

睨みながら春樹の耳を摘む。

「バレてた？わりっ！！」

そういい、軽く舌を出す。

「わりっ！！じゃない！！放課後、図書室に来いっ！」
春樹の耳を強く引き、急に離す。

「はいはいっ分かってますよぉー」
片手を挙げて教室に入っっていた。

「と、言うことでよろしくねえ」

麗華はそういうと、自分の教室に向かっていった。

ただいま俺は「放心状態」です。

なんでかって？それは今、麗華が言った言葉が以外で…。

『もし、しょうちゃんが一番高い飛び込み台から飛び込んだら…その、告白O・Kにするねっ。』

そう言われた。俺の心臓は高鳴りすぎて放心状態になってしまった。

「絶対、飛び込んでやるうー！！！！」
俺は叫んでしまった。

「ここからか？」

午後8時の飛び込みようのプール。

今、俺は麗華と二人で飛び込み台の前に立っている。想像していたよりはるかに高く、暗いせいか水面が見えなく、恐怖度アップである。

「そ、だよー」

麗華はにこやかに微笑んでいる。

「私、さきに飛び込んでいい？」

そういつて、上に着ていた服を脱いだ。暗闇からでも分かる白い綺麗な肌が露になる。俺の心臓は高鳴り、麗華を見つめていた。

俺は麗華の水着姿を見つめていて「先に飛び込む」ということに返事もせず、驚きもしなかった。

麗華を見つめているうちに麗華はあっさり飛び込んでしまった。

水しぶきがたつ。

でも、音はさほどしなかった。女の麗華が飛び込めて男の俺が飛び込めないはずがない！

いや、そうじゃなくて！！俺は麗華に告白をO・Kにしてもらったんだ！！！！

飛び込み台にたとさっきの胸の高鳴りが恐怖と緊張のものに変わった。

下を見ると麗華が優しく微笑んでいる。

俺は深く深呼吸をした。

——そして……

4・男と女（後書き）

さて、翔は飛び込めるのか?!これは次回ということぞ!!

今回は、春樹くんが多く登場しました。まあ、春樹くんには麗華ちゃんを諦めてもらわないといけませんからね...!!でも、春樹くんは幸せにさせるんで、心配しないでください。
なにが心配?!って言われそうです...

感想、評価お願いします。

第三章 1・幸せ

「しゅーちゃん♪」

体中を感じる冷たさと快感。

麗華が抱きついてきた。俺はためらいもせず、抱きしめた。ずっと夢見てきたこと。ずっと、感じたかった彼女の温もり。

「レイ……」

何回も彼女の名前を読んだ。髪から滴り落ちる雫。瞳から溢れる雫。二つが一緒になってプールに落ちてゆく。

「俺と付き合ってくれる？」

そついうと、麗華は俺の肩に埋めていた顔を上げて、じっと見つめる。

少し、不安になった。こんな完璧な女性が俺と付き合ってもいいのか？

そんなことを考えていると、麗華の口元が上がってゆく。

「お願いします。」

可愛らしく微笑んだ。まるで、プロポーズを受け入れてくれたよ

うにうれしかった。

「好きだよっ」

そういつて、初めて彼女の唇に自分の唇を重ねた。
すごく柔らかくて、甘かった。

私は、しょうちゃんに分からないように涙を流していた。
これで、祐希のことで泣くのは終わりにしよう。

もう、忘れよう。

過去を振り返らずに生きていこう。

私は、心に誓った。

さようなら、祐希。

そして、最後の涙がこぼれ落ちていった。

あれから、3年がたった。

俺たちは25歳になってた。

俺たちはあのころと変わらず、愛し合っていた。

あのころより、綺麗で大人っぽくなった彼女は、今も生徒に人気である。

生徒といえば、あの4人だ。

田代 龍。

森川 春樹。

伊藤 琴美。

君島 舞。

4人は、21歳になっていた。

それぞれ、今を生きている。

あいつらの関係が変わった。

龍は長年の片思いから脱出した。

琴美はいつも優しくしてくれる龍に惹かれていった。

今や琴美は龍、オンリーだ。

春樹は相変わらず、麗華に惚れているが、俺らが愛し合っているのを知っているから、そこらのまあまあの女と遊んでいる。また、遊び人に戻ったてわけだ。

ちよくちよく、麗華に会いに来ては、口説いている。半分本気で、半分ふざけて。

そんな春樹から苦笑いして、逃げている麗華が気の毒でしょうがない。

一番、変わったのは舞かもしれない。

今は、年下の男と付き合っている。

龍と琴美が付き合いだして、すぐくシヨックを受けていた。麗華に相談もしてたしな。

いままで付き合った男は星の数より多い。

たった三年で！？って驚いた？

きつと、龍を忘れるためだろう。

付き合ってきた男は皆、年下でどこか龍に似ていた。

雰囲気とか？

今、付き合ってる男、名前は忘れたけど、そいつは龍の高校時代の顔にそっくりだ。

やっぱり、忘れられないんだな。

「同情」は人として最低だと思うけど、同情しかすることができない。

同じ人間なのに、みくなしていると感じる。 たった何年か早く生まれただけなのに…。

決して、優越感に浸ってはいけないのだ。

「ごめん、しょう。 まったあー？」

麗華が走ってきた。 俺らは仕事場が変わり、同じ学校ではなくなってしまった。

だから、こうして夜に会っているんだ。

麗華は俺のことを「しょう」と言うようになり、俺もレイではな

く、「麗華」と呼ぶようにした。

それにしても、麗華はまた人目を奪って現れた。男は皆赤面して
みている。女も尊敬するような目つきで見つめている。

はあー。

俺は大きくため息をした。

「ご、ごめん。怒ってる？」

悲しそうな顔をしている麗華を見てあせった。
ため息をしたタイミングが悪かった。

「怒ってない。ただ、お前がまた、人目に付いてるな。って思っ
ただけ。」

少々、さびしそうな顔をした。

「はは、嫉妬してくれたの？」
いやらしく、微笑む麗華。

「少し…、な。」

そういつて、目をそらした。だんだん顔が熱くなってゆく。

「うつれしー」

そういつて、俺の腕にしがみつく。余計に顔が熱くなる。もう、3年も付き合ってるのに、なれない。

もしかしたら、永遠に慣れないのかもしれない。

今が一番楽しい。

麗華という時間が一番楽しい。

こんな時間が一生続くと思っていた。

幸せなんて、一瞬で壊れるものなんだ。

あんな簡単に…。

たった、一言で…。

麗華……。

れいか……。

第三章 1・幸せ（後書き）

第三章です。せっかく、翔が幸せを感じてるのに、あんな書き方だと、またかわいそうになる。みたいなかんじですよね。

本当はどうなのでしょう。

2・急に!?

俺は自分に自信がない。

自信を持つことができないんだ。

「はっ?ミスコン!?!」

驚きのあまりに大声を出してしまった。

皆の視線が一斉に俺に向く。

「そつ、頼まれたんだあー」

そういつて、小さくため息をついた。

こう見えて、麗華は頼まれたら断れないタイプだ。

「私、精一杯頑張るからっ！！！」

笑顔でそういわれたら、俺は止めることができない。

「お前なら、優勝間違いなしだよ。」

作り笑顔で言った。

ミスコンは、全国的にテレビで放送され、優勝すれば芸能界デビューはもちろん、売れるのは間違いなし。と、言われているほど、大きなコンテストだ。

そんな、コンテストで優勝などされてしまったら、また遠い人になってしまう。

それに、いろいろな麗華の姿を他の男共やつらに見られたくない。

もし、俺がこのことを本人に伝えれば、出るのを辞退してくれるだろう。

でも、俺にはそんな勇気がない。

怖くて言うことができないのだ。

「で、ね……。コンテスト、明後日なの。」

こちらの様子を伺いながらいう姿を可愛いと思い、少し反応が遅れた。

「はいっ？」

少々、声が裏返ってしまった。

「応援、来てね。」

やはり、おびえている様子だ。

「ああ、頑張れよな。」

（そんな、急に？もっと早く言えよっ）

（こんな間近になって言うことか？）

どっちも言いたいことだった。

でも、言葉が出てこない。喉で詰まってしまう。

「うつわ、もうこんな時間！！しょーう早くうーー」
時間なんてあっという間に過ぎるものだ。
もう、「明後日」になってしまった。

「あいよ。」

本番、3時間前。

昨日、緊張するから。という意味の分からない理由で俺んちに来た。

勝手にきて、勝手に人のベットのの中に潜りこんできた。
そのおかげで、俺は寝不足だ。

「はあ、一次で落ちたらどうしよう。」

麗華が一次で落ちることなんて想像が付かない。
エントリーした人の写真を見せてもらった。

ダントツで、麗華が一番。

だと、俺は思う。

あくまでも、俺がだが。

でも、今まで彼女が好きだった人は大勢いたし、綺麗だとか、可愛いだとか思わない人のほうが少なかったはずだ。

彼女ならきつと、大丈夫だ。

と、自分に言い聞かせながらも、不安は消えることはなかった。

幕が上がリ、真っ暗だったステージが一気に明るくなった。

「エントリーナンバー、50番」

一番最後に呼ばれたのが麗華。

全員が同じ衣装でスタートする。

純白のイブニングドレスに身を包んだ麗華。

少々、胸元が開きすぎな気がするが、とても似合っていた。

うつとりと彼女を見つめる。

やはり、彼女が一番輝いている。

光が彼女を包んでいる。

でも、そのときは気づかなかった。

いや、考えもしていなかったんだ。

光には必ず、影がつきまとうということを知りながら...

人は永遠に輝いていることはできない。

必ず、闇が待っている。

俺はそんなことも分からなかった。

このあと、彼女が苦しむことなんて…

考えもしなかった。

2・急に！？（後書き）

はい、最後らへんが悲しい感じです。

さて、何が起こるのでしょうか？！皆さんも想像してください。

そういえば、新たに連載をスタートした小説がありまして、「運命は奇跡」というのですが…

まだ、評価がひとつもない訳で…。

よかったら、評価お願いします。「君と俺」のほうも。

3・両思い…

「グランプリは、50番の藍澤 麗華さんです。おめでとうございます。」

気が付いたら、終わっていた。

ただ、ぼーとステージを見ていただけ。

記憶はまったくない。

覚えているのは、麗華がドレス姿で出てきた所まで。

それで、今になる。

「しょう、グランプリ取っちゃったあー。」
えへへと少し舌を出して言う姿はかなり可愛い。

「おめでとう……」
ただ、それだけしか言うことができなかった。

「ありがとう」
俺は、彼女の笑顔を見るのが大好きだ。
でも、またこれから近くで見ることができなくなるかもしれない
思った。

テレビの外から見ると、ただの「ファン」になってしまいかもしれ
ない……

そう思うと、すごく胸が苦しかった。

「藍澤さん、お話聞かせてください。」
外に出た瞬間、マスコミが写真をとった。
シャッターがまぶしくて、目を瞑る。

「その方はだれですか？まさか、恋人？」
誰かがそういった。

「は…」

「いいえ、ただの幼馴染です。」
彼女が何かを言おうとしていたが、その前に言った。

俺なんかが、恋人と思われたらこの先可哀相だ…

「なんか、怒ってる!?!」

車のなかで思った。

いつもなら、

「しょうの家、寄ってくー」

と駄々をこねるのだが、今日は言わないまま麗華の家に付いた。
言わないのは言われないでショックだ。

「怒ってるっ!?!」

そういつて、そっぽを向く。

「どうして!?!」

ドアのロックを解除して、ハンドルにひじをのせ、麗華の顔を覗き込む。

「だって、ただの幼馴染って…」

そういつて、さっきまで怒っていた顔がだんだん泣きそうな顔になってきた。

「お、おい…」

慌てて、彼女頭を撫でた。

今度は、手で顔を隠した。完全に泣いている。

「だって、俺なんかが恋人だつてばれたら、この先いろいろたいへんだろ？だからさあー…。」

だんだん小さくなつていった。

彼女を抱きしめると、頭をポンポンと叩いた。

「でも、俺の彼女です。つて言つてほしかった…」
うーうーとわめきながら泣いている。

「はいはい、ごめんなあー。」
ぎゅーと抱きしめる手に力を入れる。

「なあ、このまま、お持ち帰りしていい？」
麗華の返事を聞かないまま、ドアにロックをかけて、車を走らせた。

麗華を抱きしめながら…。

「うん…」

俺の中で、小さい返事が聞こえた。俺は満足げに微笑みながら運転を再開する。

3・両思い…（後書き）

やっぱり、二人は両思いです。

このまま、ENDまで、突っ走れ！。

でも、そういくといいのですが…。

人間ってものは直進はできませんからね…。目を瞑って、歩くと必ず曲がってしまいます。

さて、二人はまっすぐ進むことができるのでしょうか！？

4 …前兆。

「おはよう、麗華。」

俺は先に起きて、テレビを見ていた。
しばらくして麗華が出てきた。

「おはよお…」

あくびをして、目をこすっている。

「顔、洗ってくるね…」

麗華はやはり、目が腫れていた。
昨日、散々泣かれた。

しょうは、私のことどうでもいいんだあー。
とか、

私のこと、嫌いになったんだ…

とかとか、かなりマイナス思考なことを言っていた。

どうでもいいわけないだろ！？
とか、

好きに決まってるんだろ！？

って、言ってもなかなか分かってくれなかった。

どうしたら、あんなに綺麗な女性メスがあそこまでへこめるんだろう。
と不思議に思った。

「しょうのせいで、目が腫れたあー…」
微笑ながら言っている。これは、冗談交じりに言ってるんだな。
っと、思った。

「ごめんなあ…」
そういつて、頭を撫でる。
なついている子猫みたいで可愛い。

撫でられている麗華の顔も好きだ。

とにかく、可愛い。

「あれー！？藍澤先生じゃない！」

男は、ニヤニヤいながら、麗華を見る。そして、その後俺を見ると目を細めた。

「偶然だね」

麗華は苦笑いをしている。

偶然ではない。麗華が勤めている学校を知っているから、待ち伏せていたんだろう。

「どうしたんですか？」

麗華もそれは気づいている様子だった。

男は、『山本 裕二郎』。

「じゃあ、私は失礼します。」

につこりと微笑む。俺を見ると、さっきより微笑んだ。その笑顔はさっきみたいによそよそしいものではなかった。

「おいっ！なんであんたが一緒にいたんだ？勤務先、ここじゃないだろ？」

山本は明様に不機嫌だ。それを見ていると、こっちまで不機嫌になつてきた。

「お前こそ、何の用だったんだよ？」
冷たく睨む。怒りをこめて。

「関係ないだろっ！！」
そういつて、俺を睨むと帰っていった。

俺はしばらく動くことができなかった。ただ、呆然とアイツが消えた方向を見ていた。
俺の心はぼっかりと穴が開いてしまったようになんも考えられなかった。

きっと、アイツは毎日麗華に会いにくるだろう。何されるだろうか？何を話すのだろうか？そう思うと、胸が苦しくなった。

なんとなく腕の時計を見た。

時計の針は8を指していた。

完璧に遅刻である。

俺は慌てて荷物を持つと、わりと近くにある自分の勤務先目指して走り出した。

それと同時に、生ぬるい、でも乾いているどうも気持ち悪い風が吹き出した。

嫌な感じがした。

一瞬止まると、目を細める。

そして、また走り出した。

何も知らずに…

これが前兆だったなんて…

そのときは思いもしていなかった。

4 ∴ 前兆 (後書き)

なんか、嫌な終わり方ですね…。

なあーんで、自分で書いているのに…

はあー、嫌だな…

第四章 1・彼女の過去に振り回されて…

はあー。

私は、大きなため息をした。

あの日から、毎日のように山本先生が待ち伏せのように校門の前で待っている。

そのせいで、しょうは不機嫌だし…。

2人でよく喧嘩をしている。

私は、いつのタイミングで仲立ちすればいいかわからなくてかなり困っている。

なんか、私が悪い感じ？

「しょうっ！」

今日こそは、山本先生から逃げるということで、裏門から出てきた。

俺の顔を見るとうれしそうに微笑んでいる。

「お待たせー」

そういつて、俺の腕にくっついた。

麗華の優しい、甘い香りがして、クラッとしてきた。

「俺んちくる？」

麗華の頭を撫でながら言つと、彼女は恥ずかしそうに頷いた。

俺が幸せだと思つときは、麗華と2人きりでいるとき……

麗華が恥ずかしそうに笑っているとき…

いじけてそっぽを向く麗華…

俺を好きだといってくれる麗華…

そんな麗華という時間だけが俺の幸せだった。

だった…

のに…。

「麗華ちゃん?!」

俺と麗華が2人で町を歩いていると知らないおばさんに声をかけられた。

「はい、そうですが…」

麗華はそういつて、後ろを向いた。

「えっ…」

そういつて、麗華は動かなくなった。

繋いでた手を離して、その手を思いつきり握っている。

目に涙をたくさん溜めて…

切れてしまいそうなら強い強く唇を噛んで、おばさんを見ていた。

「麗華、どうしたんだ?」

話しかけても全然反応がなかった。

まるで、俺がいることを忘れているかのように…。

「ごめんね…、声かけようかまよったんだけど…」

おばさんは、そういつて鼻を抑えた。

その姿は小学5年生のようだった。

「なんで、ここにいますか？」
やっと口を開いた彼女の声は低く、震えていた。

「私のこと、恨んでるわよね…」
おばさんは悲しそうに言った。

「ええ、とつても…。恨んでも恨みきれません！」
彼女の口からこんな言葉を聞くとは思わなくて驚いた。
驚いて彼女をみると、涙を流しながらも力強く笑っていた。

「本当にごめんなさいね…。悪気はないんだけど…」
おばさんがそういつた瞬間、彼女はピクツと反応した。
だんだん表情が怖くなっていく。

「ごめんなさい？悪気がない？笑わせないでよ！！あんな、全然
悪いと思ってないじゃん！最低…。　か、えして！かえして
よぉー…」
はじめは怒って震えていた彼女だが、最後は泣いてその場に座り
込んだ。

こんな麗華を見たのも初めてでどうしたらいいかわからなかった。
「そんなことはないわ…。ちゃんと反省した…」
そういつて、麗華に手をさし伸ばした。

―パチン

その手を振り払うと、キツと睨んだ。

「反省なんてしても、帰ってこないんだ!!」
両手で顔を覆っている。

しばらくして、その手を取って、涙を拭いた。

そして、大きな声で力強く言った。

「私の祐希を返してよおおー!!!!!!」

俺は「祐希」という言葉に反応した。誰だ? 「祐希」って…

「私、一生あんたのこと許さないから…。一生苦しんで欲しかったのに、自分の犯した罪に苦しんで生きて欲しかった…。」

そいうと、悲しそうに微笑んだ。

「でも、あんたは自分が犯した罪を償おうといていない…。だから私は許さない!」

無表情で言うと、こんどは冷たく微笑んだ。

「もう二度と私の前に現れないください。おそらく、苦しむのは私だけなので…」

彼女はそいうと、走り去ってしまった。

俺は慌てて追いかけようとした。

が…

「待つて！あなた、麗華ちゃんの彼氏？」
俺は、ゆっくりと振り返るといった。

「そうですが、なにか？」

「話しておきたいことがあるの……」

俺は黙って、おばさんを見ていた。

第四章 1・彼女の過去に振り回されて…（後書き）

あーあ！麗華ちゃん壊れちゃった。

怒りを押さえていたネジが一瞬にして抜けてしまいました…。

残された翔くん。聞かされるのは？

2・重い死…

「話しておきたいことってなんですか？」

俺は冷たい口調で言った。

「あの子…、麗華ちゃんには、一生忘れられない男ヒトがいるの…。」
おばさんはそういつて下を見た。

「え!？」

俺は目を見開いた。麗華にそんな人がいることなんて知らなかった。それどころか、麗華がそんな1人に執着するなんて考えられなかった。

「私は自分の息子、祐希を殺したの…。」

その言葉を聞いて俺は放心状態になってしまった。

昔、麗華には大好きな幼馴染がいた。
その人の名前は、「池澤 祐希」

でも、小学5年生の時に帰らぬ人となってしまった。
自殺…

精神的にかなりつらかったらしい。
ストレスがかなり溜まっていた…

でも、そんな彼にも安らぎの時、幸せだと感じる時があった。
それが、麗華と遊んでいるとき…
麗華と一緒にいるとき…

彼は実の母親に虐待を受けていた。
それでも、彼は我慢を続けていた。それは、お母さんが好きだったから…。おなかを痛めてまでも自分を生んでくれたことに感謝をしていたから…。

でも、麗華にだけは知られなくなかった。ずっと、守ってあげたかったから、そんなかつこ悪い姿を見せたくないかったのだ…。
が…。

麗華に知られてしまった。見られてしまった。その瞬間、涙が出て、本気で死のうと思ったんだ…。

「れえーちゃん…」

彼は泣いたまま笑った。

「祐希……？」

それはきっと、麗華に心配させないようにだと思う。

「れえーちゃん、大好きだったよお……」

過去形だったことに疑問を持った。

「わたしも…、祐希のことだいすきっ」

麗華はそう、笑顔で答えた。

彼は決心したように立ち上がる。

そのときの顔はすごく男らしく、かつこよかった。

「……うん、うん。」

麗華は大声で叫んだ。

彼は、ベランダの手すりの上に立つ。

彼はゆっくりと振り向く。

そして…

「ねえーちゃん、ありがとっ！だいすき……」

もう一度微笑むと彼は星の光る、きれいな夜空に一瞬で消えた。

「ゆいちゃん、おはよう。早く起きなさい。」

麗華は大声で叫んだあと、動かなくなった。

生きていても、心は死んでいて、
見ているこっちも心が痛かったそ
うだ…

「麗華にそんなことが…。」

俺は麗華がくるしんでいたのに気づいてあげられなかったことに、自己避難した。

きつとあの時、麗華はこんな気持ちだったんだ…。と思って、胸が苦しくなった。

昔、龍に抱きついて泣いていた麗華を思い出した。このことで泣いていたのだろうか…！？だとしても、俺に相談してほしかったなあ…と思った。

龍たちが幼馴染で昔から仲良かったということで、祐希くんを思い出したのかもしれない…。

「今では後悔してるわ、でもあの時は止められなかったの…。祐希が悪かった訳ではない。でも、一番近くにいたのがあの子だったから、当たっちゃったのよ…。最低よね…」

今頃後悔したって遅い！って怒鳴りたかったけれど、俺は部外者だから、深くは関わってはいけないと思い、抑えた。

おばさんが帰った後、すぐに麗華に電話をした。
でも、繋がらなかった…。

俺は心配になって、麗華が行きそうなところを全部回った。
いろいろな場所に行った。でも、見つからなくて…。

しかたなく、麗華の家に行った。

窓とカーテンの隙間から光が漏れていた。

いる！！

そう確信した俺は、急いで麗華の家に行った。
いくらチャイムを鳴らしても出てこない麗華に不信感を抱いた。

俺は、持っていた麗華の家の合鍵で鍵を開けると、中に入った。

テレビの音がまだしている。

大量の缶。

缶と缶の間で目を瞑っている麗華…。

顔が真っ青で、怖くなった。

はぁ、はぁという息聞こえる。一安心。

生きてる。それだけで俺は幸せだと思った。

「ゆうき…。私を置いてかないでよ…。まってえええー」

麗華が叫んだ。

苦しそうに顔をしかめ、冷や汗をかいている。

麗華はむくつと起きると、ベランダのほうを見て、怯えた。

「私、祐希のこと、忘れたことなんてないよ…。しょうと付き合うときに、忘れよう！って思った。でも、忘れられなかった。私は祐希のことを忘れることなんてできなかった…」

そういつて、涙を拭いていた。

「私、自分を見るのが嫌なの…。写真でも、鏡でも…。私は、赤茶の髪、まん丸の大きな目、白い肌…小学5年生までの祐希しか知らない…。本当はね、自分だけが年とるのがやだ！怖い…。誕生日なんて何であるの？なんで、人って成長するの？って、何百回思ったかわからない…。私、祐希のところに行きたい…。どうやったら、いける？どうやったら、帰ってきてくれる？」

麗華は、泣きながら首を傾けた。

「やだっ！なんで…。なんでそんなこと言うの？！」
誰も何も言っていない。ここには、俺と麗華しかいない。でも、麗華には見えているのかもしれない…。祐希くんが…。

「まって！！行かないでええー！」
そういつて、ベランダに飛び出した。
手すりにたとうとしている。

「れいか！！！！！！！」

俺は麗華に抱きついて落ちるのを阻止した。
慌てて部屋の中に入ると、鍵を掛けた。

「なんで…！？なんで止めたの？祐希、行っちゃったよ…。もう、

二度と帰ってこないって…。どうしてくれるの？」

そういつて、振り向いた麗華の顔を見て、驚いた。その顔はすごく恐ろしかった。恐ろしすぎて、後ずさりしてしまった。

麗華の目には、光なんて映っていなかった。いつもは、きらきら光っていて、笑っている麗華…。でも、今は別人のように…。死んだ人間のような目をしている。

「れいか…!？」

俺は、麗華の腕をとって、抱き寄せようとした。

「やめて…!!!!」

そう叫んで、麗華は倒れた。気を失ったようだ…。

今日は、初めてみる麗華が多かった。

誰にでも優しい麗華が、人に冷たく言っていた…。

あんな、怖い顔をした麗華を見たのも初めて…。

腕を取ろうとして、阻止されたのも初めて…。

俺は、うなされている麗華を見ているのが苦しくて、彼女を部屋に連れてって、寝かせた。自分はリビングのベツトで寝た。

あんな麗華を見るのは辛いけれど、今帰ってはいけない気がした。

2・重い死…（後書き）

うわっ！！内容暗っ！！！！重っ！！！！！！
読み直して…。思いました。

でも、ここを乗り越しえてもらわないと…。
この先、話が進まないから！！
我慢してください！

評価、感想お願いします。

3・籠の中の鳥…

「なんだよ、お前！」
部屋中に声が響いた。

「もういい！！しょうなんて嫌いっ！バイバイ！！」
麗華は泣いて家を飛び出した。

俺はただ、麗華が出て行った玄関を見つめて、呆然としていた。

怒鳴ろうなんて思ってなんかいなかった。
でも、なんだかムカムカしてきて…。

死んだ「祐希」くんに嫉妬して、一人で焦って。
馬鹿みたい。

私は今、祐希のお墓に来ている。
はじめてきた。

本当は一生来ないつもりだった。

だって、ここにきてしまうと、祐希が死んだって認めたみたいで怖い…。

でも、今日は…

「祐希…。ごめんね、今まで来ないで…。ごめんなさい…。私、祐希のこと忘れようと思った。忘れないでいいよね…。忘れちゃだめだよね…」

祐希が生きていたことは確か。私が好きだったことも確か。

うそでも、幻でもない。

真実…

私は、祐希が生きていたことを忘れてはいけない。

祐希と過ごした数年間を忘れてはいけない。

祐希を愛したことを忘れてはいけない。

だって、私にできることはそれぐらいしかないから。

私、頑張^つて生きるから、空^{そら}の上で見守^{もも}っててね。

もし、私が情けないことと考えていたりしたら、注意してください。

いつか、祐希のところに帰るから…。

そのときが来るまで、待っていてください…。

でも、きっとまた祐希に迷惑をかけちゃうね…そのときは遠慮なく迷惑だっていつてく下さい。

そして私、迷惑かけないように頑張るから。

だから、そのときが来るまで少しの間お別れだね…。バイバイ！またね…

空はもう、赤く染まっていた。

沈んでいく夕日を見ながら、私は一筋涙を流した。

これで、本当に最後…。

私は、沈んでゆく夕日に誓った。

強くなるってことを…。

何があっても怯まない心を持つ。

夕焼け空に照らされている彼女の顔はすごく凛々しかった。

きれいな鳥が狭い籠に閉じ込められていて…

そこから飛び立っていくきれいな鳥…

大きく翼を広げて、強く、凛々しくこの、広い世界に飛び立った
…。

彼女はまだまだ成長し続ける。

強くなるために、何度も失敗をして…

何度も繰り返してやっと強くなれる。

やっと、完璧になれる。

きれいな鳥は今、狭い籠から出たばかり…。

彼女には未知な世界が広がっている…

3・籠の中の鳥…（後書き）

麗華ちゃんはやっと、飛び立ったのです。狭い籠から出ることができ、この広い世界で生きる。大切さ…。やっと知ることができた。

もうそろそろ、クライマックス？

評価、感想お願いします。

4・2人の絆

麗華と喧嘩をして、2週間あっていない。

会うことができない。

とにかく今は会わないで、頭を冷やさなくてはいけない。

すごく会いたい。

ものすごく会いたい。

でも、会ってしまつとまた怒鳴ってしまつかも知れない…

泣かせてしまつかもしれない…。

だから、会つてはいけない…

のに……

「しょう…」

麗華が校門で待っていたんだ…。

午後10時。

今日は、仕事が終わらなくて遅くなってしまった。

「麗華！？何してんだっ？」

驚いた。というよりも嬉しいという気持ちのほう大きい。
慌てて麗華に近づくと肩を掴んだ。

驚いて、目が見開く。

体が冷たかった。

「麗華、お前、いつからいたんだ？」

俺は、羽織っていた服を麗華に掛けて、抱きしめた。

「7時……」

小さくて、震えている。

麗華は泣いているのか！？

「馬鹿やろぉー…風引いたらどうすんだよっ…」

ごめんなさい。泣きながら謝っている麗華の頭を優しく、撫でた。

「あの、私……」

目に涙をいっぱい溜めて、口を開いた。

「ごめんなさい…」

ポロポロと涙が落ちている。

「謝んなくていいよ…。俺こそ、怒鳴ってごめんな…。」
そういつて、涙を拭いてやった。

「あのね、私…。翔に話しておかないといけないことがあるの…。」

そういつて、俺から離れた。

嫌な予感がした。

別れるなんて話じゃないだろうな!?

祐希くんが忘れられないから…

とか？

「私ね、昔、好きだった人を亡くしたんだ…。目の前で自殺されたの…。祐希がね、学校休んだから、心配で家に行ったの。そして、お母さんに虐待されて…。私、一番近くにいたのに気づいてあげられなかった…」

鼻をすすって、俺の目をしっかりと見た。

「祐希ね、最後に『れえーちゃん、ありがとっ！だいすき…』って言ったの。すごく優しい目をして、微笑んでくれたんだあ…。」

「しょうには悪いけど、私、祐希を忘れることができない…。思い出にしたいくないんだあ…。」

ああ…。やっぱりそうか…
わかっていただけ…。やっぱり悲しい。

私は、祐希が生きていたことを忘れてはいけない。

祐希と過ごした数年間を忘れてはいけない。

祐希を愛したことを忘れてはいけない。

だって、私にできることはそれぐらいしかないから。

そういった。

彼女は、いつの間にか泣き止んでいて、空を見ていた。

「だから……」

そういつて、空から俺へと視線を移す。

「そう思っている私でいいなら、このままお付き合いしてください。」

真剣な目…。

何があっても怯まないような、力強い目で見つめている。

でも、予想外の言葉に驚いた。

てっきり、「別れてください」かと思っていたから…。

「ああ、それでもいい。そもそも、俺が麗華の恋人になれたのは奇跡みたいなものだから…。これからも、俺と付き合ってくれるなんていつてくれて嬉しかった。」

そういつて、離れていた麗華の体を引き寄せた。

「ありがとう…。私、祐希と同じくらいしょうも大好きだよ。」
俺の耳元で震えている声は、すごく心地よかった。

「サンキュー…。」

俺らは、強い絆で結ばれている。

何があっても、怯まない強い心を目指す、麗華と

何があっても、麗華を離したくない、俺…

たとえ、麗華の心の中に、幼いころに愛した「男の子」がいようと、俺は関係ない…

俺は、「彼」以上に麗華を愛しているから…

一生、君だけに言っよ…

「~~は~~ういふ」

う...

4・2人の絆（後書き）

うわぁー、翔君、心広ーい！！

なあって、思っちゃったりしました。

感想、評価お願いします。

最終章 1・2人を愛す。

いままで止まっていた時間…。

私が止めてしまっていた時間…。

それが今、動きだした。

一生、小学5年生。

11歳という短い時間で止まってしまった、彼の時間…

11歳で眠り続ける、祐希…

それでも彼は、私の中で行き続けている。

どんなときでも優しく、絶対に怒ったりしなかった。

いつも笑顔で、私を支えてくれていた…

私が初めて好きになった人。

今も昔も…

大好きな人…

これから、共に生きていきたいと思う、翔…

幼いころの恋が忘れられない私…

そんな私でも愛してくれる、心の広い人。

優しく、温かく…

そして、時には厳しく…

私を包んでくれる人…

今も…

そして、これからも

大好きな人…

私は、2人を愛します。

一生…

「麗華」

後ろから、聞きたかった声が聞こえて振り返った。

「しょうっ!!」

笑顔で手を振っているのは、私の大好きな人…。

「早くこいよ!」

優しく、微笑んでいる。

「今行くー!!」

私は、微笑み返すと、慌てて彼の後を追った。

今、2人は共に歩き出した。

しっかりと、過去を背負い、前だけを見て…

最終章 1・2人を愛す。（後書き）

短いすよね…。すいません…

ついに最終章です。

残り3話といったところでしょうか…

感想、評価お願いします。

2・永遠の未来

「龍ー!!」

小麦色の肌で、真っ黒のショートヘア。3年前よりは遙かに大人っぽくなった彼女…。

その彼女は…

誰もが認める美男子…

彼に、飛び切りの笑顔を向けていた。

彼女の名を「伊藤 琴美」といい。

そして、

彼の名を「田代 龍」という。

「琴美、お前遅いぞ!!」

そういいつつも、顔は笑っており、彼女が来るのを待っている。

「ごめん、ごめん」

軽く舌を出して、微笑む。

「行くか…」

そういつて、彼女の指を自分の指に絡めた。

嬉しそうに微笑み合う2人…

この2人には、「相思相愛の仲」という言葉があっている。

誰もが認める美少年は、誰もが認めるバカップルとなった。

「森川 春樹」

「じい」で、この男の名前を知らない奴はほとんどいない。

容姿端麗な上に、運動神経抜群だった春樹は、年上にしか興味のない男…

ある程度綺麗で、年上だったら誰とでも寝る。という、ことで有名だった。

おまけに、2・3回寝たら捨てる。
男としたら最悪だよな…。

でも、麗華にだけは本当にしつこくて、まだ懲りずに会いに来ている。

「待つてよ、舞ちゃん!!」
草食系男子。という分類に入る可愛い顔の男の子。
たくさん荷物を持って、前を歩く綺麗な女性に一生懸命着いていく。

「早くー!!」
舞と呼ばれた女性はオシャレな喫茶店の前で止まった。

舞はすごく美人だ。色が白く、顔も整っている。
おとなしくて、内気な女の子。

「付き合ってくれたお礼。奢ったげるっ」
舞は笑顔で微笑んだ。
綺麗な笑顔…。

「あ、ありがとっ!!」
持っていた荷物を横のいすに置いて、男は舞の向かい側に座った。

「好きなの頼んで？」

綺麗な舞には男が近づいてきた。
その中でも、可愛い系の男の子だけと付き合っている。

龍と、琴美…

春樹…

そして、

舞…

この4人の未来。

4人の将来は輝いている。

それぞれ、自分の未来を信じて…

それぞれ、無限の可能性の未来を信じて…

2・永遠の未来（後書き）

なんだが、春樹くんが悪者みたいになっちゃいました。せめてと
思い、麗華ちゃんを思っていることだけは、変えなかったです。

感想、評価お願いします。

3・離れていても…

突然決まった、麗華の転勤。

それも、なぜか、海外…。

一年だけで帰ってくる…

って、言っていたけれど…

やっぱり、俺にとっては離れていての1年は長い。

「麗華、忘れ物ないか？」

俺は何度も聞いている。

今日は麗華が海外に行ってしまう日…。

「ないって！もう、何回言ってるのよー」

そういつて、麗華は笑う。

俺も笑っておく。笑っていないと涙が出てきてしまいそうだから…。

「そろそろ、行こっ！！」

麗華は自分の荷物を俺の車に入れて、言った。

「ああ」

嫌々車に乗ると。空港まで車を滑らせた。

30分ぐらいで空港に着いた。

車ではずっと無言だった。

2人とも話すこともなく、ただ前を向いてるだけだった。

「しよ、う…？」

駐車場に車を止めた。

もちろん、麗華は出ようとドアに手をかけた。
その瞬間、麗華を強く抱きしめた。

行つて欲しくない。

そう、思ったら手が勝手に動いてしまった。

「離れたくない…。」

そう、耳元で呟くと麗華を抱く手に力を入れた。

「ばか…」

腕の中そう、聞こえた。

ん？と言うと、麗華は涙目でこっちを向いた。

「泣くの我慢してたのに…」

そういつて、抱きついてきた。

ああ、そうか…

麗華も同じ気持ちだったのか…。

そう思つと、少し気持ちが楽になった。

「じゃあ、行つてきます。」

麗華は笑顔で言つた。

「行つてらっしゃい。」

俺も泣きたい気持ちを必死に抑えて、笑顔で言つた。

また、一年後に再会することを約束して…

だんだん小さくなっていく背中を見つめる。

頑張って来い。

そう心の中で言っ
て…

俺は静かに涙を流した。

彼女の前では決して見せられない涙…

見せてはいけない…

だって俺は、「男」だから…

大切な人を守るために、

強くなくてはいけないから…

俺は、強くなる。

3・離れていても…（後書き）

久っしぶりの更新です。

あと、一話。

頑張って完結したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974g/>

君と俺

2010年10月11日21時29分発行